

演題番号：07

大阪市内における猫ひっかき病の原因となる *Bartonella* 属菌の保菌調査

○玉井 宥¹⁾, 梅田 薫²⁾, 花立敬祐¹⁾, 木村篤史¹⁾, 松尾雅史¹⁾, 阿部拓人¹⁾, 木太俊雅⁴⁾, 亀本昌幸¹⁾

¹⁾ 大阪市動管セ ²⁾ 大安研 ³⁾ 大阪市食肉衛検 ⁴⁾ 大阪市中央卸売市場

1. はじめに：猫ひっかき病は国内で最もよく見られる動物由来感染症の1つであり、*Bartonella*属菌が猫の咬傷・搔傷から人に感染してリンパ節腫脹等を引き起こす病気である。今回、地域における猫の*Bartonella*属菌の保有状況を明らかにすることで地域住民への感染リスクを検討した。

2. 材料および方法：2017年4月から2020年1月の間にセンターに収容された猫193頭の血液、猫に付着したノミ1検体を調査材料とした。検体採取時に、調査個体情報として、性別、年齢層、栄養状態、健康状態、所有者の有無、飼育環境、ノミ・ダニ寄生等を記録した。また、*Bartonella*属菌遺伝子検出には2種類のPCR法を用いて、遺伝子陽性となった場合を菌陽性とした。これらを基に、猫の保菌率と個体情報との関連性を統計学的に検討した。分離された*B. henselae* 7株について、16SrRNA型およびMLST型による遺伝子型別を実施した。

3. 結果：猫193頭のうち、*B. henselae*を16頭(8.3%)、*B. clarridgeiae*を15頭(7.8%)が保菌していた。また、ネコに付着したノミから*B. clarridgeiae*が検出された。保菌率と猫の個体情報との関連性については、どの項目においても有意差

は認められなかったが、仔猫、衰弱・負傷猫、所有者不明猫に保菌率が高い傾向が認められた。分離された*B. henselae* 7株の遺伝子型別は、全て16SrRNA型はtype I、MLST型はST1であった。

4. 考察および結語：大阪市内において様々な飼育環境や生活背景を持つ収容猫の193頭中31頭(16.1%)が*Bartonella*属菌を保菌していることが分かった。猫分離菌の遺伝子型は、国内の患者分離株や猫分離株に多く見られる遺伝子型と一致していた。これらのことから、依然として猫を介した地域住民への猫ひっかき病感染リスクが存在していることが明らかになった。日本では猫を放し飼いすることを明確には禁止していないが、猫の視点から見た様々なリスクから、室内飼育を推奨している。本研究で得られたデータは、放し飼いのリスクは猫だけではなく飼い主である人へのリスクを示している。今後、本研究をもとに、様々なツールを利用した動物との適切なかわり方に関する普及啓発活動をさらに展開していきたい。